中学校の部

特選　課題図書部門

私たちはセカイを科学する

揖斐川町立谷汲中学校三年
植山　いろは

「かわいい。」

理科の授業で見たミジンコ。よく見ると手のようなものをシャカシャカ動かしている。こんなにも小さいのに一生懸命生きている姿にとても愛着がわき、素直にかわいいと思った。しかし、ミジンコを正面から見た子が、

「きもっ。」

と言い、そのミジンコを見に行った子たちも、

「気持ちわるっ。」

と言い出した。私もみんなの言葉を聞いて、さっきまで愛着を持っていたミジンコがだんだん気持ち悪く思えてきた。しまいには、私も一緒になって

「気持ち悪いねー。」

と言っていた。ミハイルのクラスメイトたちと同じだ。ハエトリグモを有名人がペットにしているというだけで、それまでと打って変わって、

「かわいい。」

と言い出した。私のしたこともミハイルのクラスメイトたちのしたことも、滑稽に思えた。こんな風に常識や偏見が作られて行くのだろうか。

主人公のミハイルは、父が日本人、母がロシア人のミックスルーツ。転校生の葉奈は、父がアメリカ人、母が日本人のミックスルーツ。ミックスルーツであるが故の悩みを抱え、目立たないように生きることを選んだミハイル。それに対して、蟲好きを公言し、学級の皆から嫌がられても、自分の意思を突き通す葉奈。二人とも、見た目の偏見による、周りとの見えない境界線を感じながら生きていた。

ミハイルは、目立たないように生きることを選んだが、どれだけ窮屈だっただろう。仕方がないことだと自分に言い聞かせたミハイルに、私は申し訳ない気持ちになった。それは、私が見えない境界線を引いていることに思い当たる節があったからだ。中学校のALTの先生ともっと話したいと思っているのだが、アメリカ人だから、日本の物で共通の話題はないだろうという勝手な思い込みにより、ずっと話しかけられずにいた。このような意識が、知らず知らずのうちに相手を傷つけてしまうことがあるのだと思った。

ミハイルを変えていったのは、葉奈だった。

なぜ、葉奈はこんなにも強いのだろう。理科準備室で飼っているカについて教頭先生と言い合ったときも一歩も引かず、真正面から向かっていった。それは、高校の理科の先生だったとい

う葉奈のおばあちゃんの「ちょっと見て分かった気になっちゃダメ。よく見て、よく考えて、本質を追求するんだよ。」という言葉を大切にしているからかもしれない。常識で考えると、教頭先生が言うように、カに刺されて病気になるかもしれない。また、害虫だと考える人がほとんどだと思う。しかし、葉奈はカが絶滅したら、困る生き物も出てくると、生態系の本質でもって反論するのだ。その姿に私は惹かれた。

しかし、葉奈だって辛くて泣くこともあった。そんなとき、いつもおばあちゃんがしてくれた「三十七兆個の細胞」の話。私はこの話が好きだ。世界には七十六億人しか人間がいないのに、いくつもの国に分かれて、戦ったりしている。でも、三十七兆個の細胞は、ひとつ残らずその人のために、二十四時間一致団結して働いているというのだ。「わたしのために」と思うと、感動する。単なるおとぎ話ではなく、科学的な根拠があるところが説得力があり、私の体にすっと入ってくるのだ。葉奈が立ち直れるのには、こんな秘密があったのだ。

常識で測られた世界。私達は、常識という枠の中に納まったとき、安心する。だから、常識で考え、常識で行動する。しかし、常識とは一体何だろう。常識とは、結局、人がそれぞれ歩んできた人生の中で経験し獲得してきた感覚や考え方だと思う。それは、良いとも悪いとも判断できるものではないが、見方の偏りは出てくる。すると、物事の本質は見えにくくなってしまう。

悲しいことに、今も戦争をしている国々がある。多くの人の命が奪われているのに先が全く見えない現状に、なぜ戦争はなくならないのだろうかと憤る。誰もが幸せに生きる権利があるし、幸せに生きることを願っているはずだ。ならば、どんな理由があれども、攻撃しあうのではなく、人間の本質に目を向け、お互いを尊重しあいながら生きていくことはできないのだろうか。この本は、私たちに「セカイを科学せよ！」と呼び掛けている。そして、葉奈は教えてくれた。黒人とか白人とか黄色人種とかいうが、人間はひとつの種だと。「哺乳類綱霊長目ヒト科ヒト属ホモ・サピエンス種」生物学的にヒトはみんなこの分類なのだ。だから、人種や宗教、考え方の違いによって区別するのはおかしい。

私は、葉奈がルーペでムシをじっくりと観察していたように、常識を取り払って、セカイを科学する一人でありたい。

『セカイを科学せよ！』　安田　夏菜　作　講談社

【講評】

今日までの自分の経験や、考えを改めていった姿が描写されており、本からの学びがよく見える読書感想文でした。人権についての取り組みを考え、全校に発信しようとしているあなたの思いがこの作文にぐっと込められていました。

○
○
○

○
○

作

『〇〇〇〇』〇〇書店

講評（１００字程度・よさを中心に）